
黒装束の鷹

荒巻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒装束の鷹

【Nコード】

N2633H

【作者名】

荒巻

【あらすじ】

死に瀕した父は少年にみすばらしい野心を遺す。少年は父の遺した野心を抱いて、駆け出した。

01 逃避行

もはや城内は地獄門への待機室と化している。

レンガの壁と天井に圧迫されるような狭苦しい連絡通路の両脇には延々と、包帯から血を滲ませた負傷兵達が背を壁にもたれて少しでも体を楽にしようと無駄な抵抗を続ける光景が、果てしなく続いていった。通路を満たす薄暗い空気は、血と鉄と泥と、温かみを失わない露出した内臓肉の不快な匂いに満たされている。終末への坂道の途中で、力なく腰を下ろす男達。内臓にマスキット銃の弾がめり込んでいる者、あるいは槍で一突きされ皮膚を貫かれ肉を露出している者、あるいは、治療用の包帯が足らず素手で傷口を押さえる者。満身創痍に関わらず、その目からは戦意の色が消えていない。みな一様に、家族のこと、愛する伴侶のことに思いを馳せる。彼らは、自分達のすぐ後ろにいる。距離にして約2キロほどしか離れていない、内海貿易で栄えた自由共和国トレマーズ。半径5キロほどしかない港湾都市に、おそらくは各所に点在する教会に女子供が集まり、やってくるであろう数万の敵軍の足音に身を寄せ肩を合わせて震えているに違いない。彼らに、ここより他にいるべき場所などない。数十の自治都市が点在するフロレンシアの半島に生を受けた者ならば、故郷の都市に寄せる愛郷心は絶大なものであるはずだ。彼らはフロレンシアの温暖な気候と内海の豊富な漁獲資源に育まれ、強烈な団結を誇る市民らの相互扶助制度のなかで家族や隣近所の人々と助け合い、愛されながら、都市の城郭に守られて過ごしてきた。都市に生き都市に死ぬ。フロレンシア人の一生である。男達は都市の為に戦い、今、都市の為に死のうとしている。

敗北のレンガの中を、一人の老兵が両脇の負傷兵を踏まないよう気を利かせながら、通路をヒタヒタと渡っていく。髪は短く、髭を剃り、武具にその身を固めて。懐には一通の書を携えて通路を行く。途中で階段を下れば、そこに部屋があった。レンガがむき出しの、

壁塗りも施されていない粗末な部屋だった。ドアは無い。邪魔だという理由で取り外させたらしい。「あの子」、が。部屋には、部屋というよりは倉庫のような部屋には、その身を粗末な騎士の黒装束に包んだ一人の男が、ほころびた木の椅子に腰掛けて、じっと壁を見つめていた。

ドージェ
「……総督」

老兵は堅苦しい役職名でそう呼んだ。黒装束の男は静かに振り返る。

その男の顔は、まだ、まだ17の子供だった。巷の王侯貴族の流儀からはかけ離れた粗末な散切り頭の黒髪に、平凡な体格、顔は特徴のない輪郭に包まれ、ただ唯一異常に大きい鷹のような目だけが、強烈な個性を漂わせている。17の子供だ。貴族的な優雅さからは程遠く、ただし黒の騎士姿は異常に映えていると言っている。英雄よりは、泥臭い戦争屋といった雰囲気漂わせている。もう戦場で人間の2人や3人殺したような品格だ。17でこれなら、なかなか大したものではないか。老兵は続けて言う。

「5万の兵に攻められ、ヴィレーモンテが陥ちました。トレカーナは2万の敵に包囲され、トレカーナ公が降伏するのも時間の問題だと、脱出者が証言しております」

年の割には若々しい声が響き終ると、黒衣の少年が歯軋りする音が聞こえた。少年の顔が異様に捻じ曲がり、喉の奥から透き通った声をひねり出した。

「あとはここ（トレマーゾ）だけか」

少年の鷹のような目が、鈍く光る。瞳の奥は、以外にも水々しさを増している様に、老兵には思えた。

「まだフィデツィアとコンマルゾが残っていますが、もはや推して知るべし、ですな。先の会戦で両総督は戦死し軍団は壊滅しておりますから、まともな抵抗もできませんでしょう」

老兵は澄ました顔をしている。それとは対極的に、少年の顔は苦々しさを増していった。

「――それはこちらと同じだ。ヴィレーモンテを陥とした軍団はいつごろここに着く」

「遅くて6日。早くて3日。といったところですか」

「アレッサンドロ。今すぐ市民を動員して城壁の補強を行え。こんな半ば放棄された古城では半日も持たない」

アレッサンドロ
老兵は、表情を1ミリも変えずに切り捨てた。

「無理ですな。時間が掛かりすぎます」

少年の苦々しい表情が、怒氣を得る

「では時間を稼ぐ！」

「どのように」

「俺が無傷の兵を率いて敵を食い止める。そのうちに城壁の補強を完了し、迎撃の準備を整えろ！」

馬鹿な、と、老兵は心の中で吐き捨てた。無傷の兵などどこにいる？城内には負傷兵しかいないではないか。無傷な者といえば、炊事班か文官ぐらいなものだ。いたとして、500人にも満たないだろう。その程度が5万の軍団に立ちふさがったとて、像がネズミを踏み潰すように蹂躪されるのみである。およそ30分も稼げまい。が、口にはださない。無意味で無謀な冒険的英雄心というやつは、結局のところ身を滅ぼすに過ぎないが、しかし少年はまだ17である。無意味無根拠な自信に惑わされる年頃であるし、それでなければならぬ年頃であった。

そしてそれをなだめるのが、彼、老兵、つまりアレッサンドロ・ステファノの役割である。老兵には無意味な抵抗を続けるほかに、有力な案があった。

アレッサンドロは、少年の言葉を無視して、優しく言う。

「エンツォ。貴方はお逃げなさい」

ドージェ
総督とは呼ばなかった。エンツォ少年は、少し黙り込んだ後、握り拳を作って、言った。言おうとした。

「……アレッサンドロ、それは」

だが、アレッサンドロに遮られた。優しく、遮られた。

「いいですか、エンツォ。私は貴方の、実の父親ではないが」

「アレックスandro!」

「聞きなさいエンツォ」

エンツォは、老人の言葉に従う。騎士の黒装束が、今は似合っていない。今は子供に戻っている。町外れの船着場の、オリブ畑に囲まれた一軒家で、アレックスandroに育てられた読書と釣りが好きな少年に、戻っている。

「私は貴方の、実の父親ではないが、父の言葉として聞いて欲しい」
実の父親？少年は、だからなんだ、と壁を一瞥した。トレマーズ公の血が繋がっていることなど、自分が特別視したことはない。自分分は妾の子供であり、10歳になって里子として、体よく追放されたではないか。正室に子供ができた、そう言って、あの商人上がりの成金公爵が、自分を捨てた。それから、このアレックスandroが父であった。そのことを忘れたことなど一度も無い。アレックスandroこそが、父であり最大の友人だった。

「もはやトレマーズはここまで。滅びるしかありません。総督と、そのご兄弟も先の会戦で戦死。主だった名家も商人も有力者も、船に乗って逃げてしまった。もはやこうなつては、この街を建て直すことは不可能です。すでにトレマーズは、死んでいます」

老人は、「父」はそう言つてのけた。しかし、少年は承服しない。あの忌々しい女たらしの公爵が死に、臆病者が逃げ出したただけだ。言い返す。

「しかし、街にはまだ市民がいる。そして砦にはまだ、兵士がいるじゃないか!」

「ただそれだけです。店はしまり、人々は嘆くだけで、砦には敗れた負傷兵しかおりません。それで何ができましようや」

「まだ守るべきものが残っている!」

そうだろうか？そうではないか!と少年は言うのである。およそ英雄からは程遠い容姿であったが。

トレマーズですごした日々は暖かった。人も空も海も、夕食も、

なにもかもが暖かかった。戦乱に飲み込まれ、あの平和な日々が遠い記憶のものになったとしても、だからこそ、自分達を優しく育み守ってくれたトレマーズという故郷へ対する想いは強くなってゆく。母なる故郷への想いが。少年は決して英雄的な人物でも、情熱的な人物でも感傷的な詩人でもなかったが、それでも故郷に対する想いは強い。それがフロレンシア人の常だった。

「アレックスサンドロ！周りを見てみろ」

そう言って少年は大演説でもかますかの如く、腕を強く振った。決して役者ではない。胸の内にある人間的な感情が、無意識に体を動かすのだ。

「あれだけ偉そうにしていた公爵家の連中はどこにいった！？権勢を振るった有力者達は？したり顔で説法を説いていた司祭達は？通りを支配していた商人達は？みんな逃げさってしまったぞ！金持ち
は逃げ、何も持たない市民達だけが残った！彼らには何も無い！トレマーズしかないんだ！」

そして俺は、トレマーズ公爵家の血を継ぎ、臨時的に総督に叙任ドージェされ、今防衛戦の指揮を執っている。他に指揮を執るべき人間が死に、あるいはほとんどが逃げさってしまったからではないか。そう、少年はまくし立てた。

本来ならば一般市民として、教会にあつまる女子供か、あるいは負傷兵の群れに混じっているはずだった少年が、今は指揮を執らざるおえない。トレマーズはそれほどまでに迫り詰められている、悲惨にも、惨めなほどに、散々甘い汁をすってきた有力者どもから見捨てられて。

「トレマーズの為に戦える人間が戦ってやらないといけない。俺が逃げれば、誰がトレマーズの為に戦ってやれるんだ？ただ負傷兵と女子供が寄り集まって、のたれ死ねばいいのか？」

しかし、

「貴方がいて何ができるのだ」

アレックスサンドロは切り捨てた。父として。

「貴方が戦おうが戦うまいが、どちらでも変わらないことだ。トレマーズは死ぬ」

「しかし故郷の為に戦ってやるのが、故郷に育まれた者の義務だ！」

「ならば貴方の義務は、私が背負おう」

少年は気づいていない。老人の顔は、ひどく優しい。子供をなだめるように言う。

「いいですかエンツォ。貴方は私の実の子供ではないが、父として貴方を心を砕いて育てたつもりです」

少年は黙りこくって、腰の鋭剣を握り締めた。まだ男としての意地を捨てたくない、そう暗に主張しているのである。

だが、アレックスandroとしては、ぜひとも捨てていただかねばならない。そう、父としては。

「貴方には生き残って欲しい」

少年は唇をかみ締めた。

「まだここで死んで欲しくは無い」

少年は俯く。「父」の固い意志に触れた気がした。

「私も昔は軍人であり、野心家でもありました。いつか腰の剣一つで、何か大きなものを成し遂げてやろうと思っていました」

もはや少年は口を挟まなかった。男が、追い詰められた男が、自らの過去を語り始めることの意味を、少年は無意識のうちに察してしまった。

「そのためならば何でもしようと思いましたが。略奪殺人戦争…ですが、私は挫折してしまった。挫けてしまったのです。男として大事を成すべき人生と知りながら、意志を弱めてしまった、捨ててしまった、結局は単なる「その他多数」のうちに終わってしまった。何もせずに……。でも、その半生のうちに、自らの生涯を捧げてなすべき目標を見つけました」

少年は、

「貴方です。エンツォ」

少年は、腰の鋭剣から手を、そつとはなした。

「私は貴方を育て上げた。わずかに7年の短い間でしたが、自分の持てる全てを、貴方に託した……。戦争、謀略、処世、人の欺きかた、世の中はどれだけ正義という言葉が無意味なものか、どれもろくなものではありませんね」

老人の顔は、どこかもの悲しくなっていた。自らの生涯が、野心的な傭兵として、なのに途中で野心を捨ててしまった落伍者として、薄汚れたものであったと、それに今更ながら気づいて、自分はいったい何をしてきたのか……。それなのに、捨てたはずの野心なのに、まだそれを諦めきれないでいる。死に瀕したこの状況にあってさえ。「これ以上「敗北者」としての人生を続けたくはありません。ですから私は、ここで「愛郷者」と嘯きなら死にます」

少年は悲しくなった。自分を育ててくれた恩人が、その知識を教えてくれた恩師が、最大の友人が、自分は薄汚れた敗残者だと、無意味な人生だったと嘆く姿など、見たくは無い。しかし、

「ですが、あの野心を、半生を捧げた野心を、諦めきれない。だからエンツォ、貴方に継いで欲しいのです。私の野心を。だから生き残ってください、エンツォ。私の子よ」

子として、友人として、この老人を助けてやりたい。この哀れで惨めな老人を。せめて安らかに死なせてやりたい。

「貴方が生き残ってくれさえすれば、こんな私の、薄汚れた惨めな人生も、無意味なものではなかった。そう思えます」

「分かったよ。アレッサンドロ」

少年は静かにそう答えた。静かな決断だった。父も市民も守るべき街も、全てを見捨て、ただ一つ、薄汚れた野心を継ぐという、静かで血なまぐさい、決断だった。

老人は悲しく返した。

「ありがとうエンツォ。許しておくれ。惨めな私を。もっと、よき夫として一生を送るような教えを与えるべきであったのに。私は薄

汚れた野心に囚われてしまった。許してくれ、エンツォ」

少年は走った。早い馬を駆って、故郷を捨てて、父の遺志を継ぎ。フロレンシア最南端のボローに着いた頃には1日が過ぎた。そこで船を借り、季節風に乗って内海を東へ漂った。

少年が逃げてから5日目に、トレマーズは陥落した。

攻めたのは、デューダー朝セレニア、獅子王ホルストだった。

02 廃屋の交渉

「エ、エンツォ。やっぱり、これは……今回はだな……」

臆病に駆られた黒髪の若い男を、同じく黒髪の、しかし鷹のようにギョロリとした目を持つ男が、右手で制した。

（おいおいおい、本気かい）制止された若い男は、緊張感からか、諦観か、それきり口を真一文字にきゅっ、と締め、体を固まらせて全てをエンツォとよばれた鷹の目を持つ男に任せきりにすることにしたらしい。ただ、眼球だけが、あっちゃこつちをせわしく行ったり来たりしている。

薄暗い、何年も手入れされていない荒れ果てた廃館の居間で、巨大なテーブルを境に男達は対峙していた。

一方には、鷹目のエンツォと、もう一人の黒髪の若い男。そしてもう一方には、赤みがかった金髪に無精髭を精悍な輪郭に放置している、30前半程度の伊達男、そして、その後ろに控えるみすばらしい格好をしている……盗賊集団。

エンツォの脇に控える黒髪の若い男は、どれもこれも屈強な体つきをした盗賊集団の雰囲気完全に飲み込まれていた。相手の腰には、例外なく鞘に納まった剣が下げられている。相手が相手だけにいつ襲われるかと心臓が興奮しきっており、体中を過剰な勢いで血液が駆け巡り息をするのがやつとの精神状況であった。

一方で、エンツォは冷め切った目で、向かい側の無精髭を見つめている。

エンツォは、静かに口を開いた。

「それで、ヘル・ベルツ。考えていただけたかな」

よく透き通った、独特の濃い声だった。向かい側に集まる盗賊達は、誰一人表情を変えず、睨むでもなく、侮蔑するでもなく、こちらをただ見つめている。

ただ一人、ベルツと呼ばれた無精髭の伊達男だけが反応した。ただ眉をぴくりと動かしただけだった。

「どうやら不満なエンツォは催促するかの如く続ける。

「こちらとしても事情がある。アデマル伯の懐も無限ではない……月に何回もこう、街道を行く馬車を襲撃され、穀物を強奪されては、伯家の財政も傾く。看過できないところまで来ているんだ」

「じゃあな」

無精髭のベルツが不意に、返す。エンツォの脇に固まる黒髪の若い男がぴくりと心臓をはねつけさせ、ベルツの後ろに控える盗賊集団がにわかに視線を尖らせた。

ベルツが十分間をおいてから、口を続けた。

「どうやって飯を食っていきばいい。どこに耕す畑がある？ いまや^{エスタンライヒ}東方帝国全土を餓えが覆ってるじゃねえか。畑は片っ端から荒れ果て、必死に耕しても戦乱で一ヶ月も持ちやしない。今じゃ農民よりも浮浪者の方が多いんだぜ？ 馬鹿馬鹿しい」

ほれどうだ、といわんばかりにベルツは両手をかざす。どうやら饒舌な男らしい。

「……奪うしかねえのよ。食っていくにはな。俺達は生存本能に従ってるだけだぜ」

盗賊達は心の中で頷いていた。

エンツォの脇に控える黒髪の男は、盗賊達の様子に気づいた。そういえば……

「こいつらの半分だって元は農民だ。畑を耕してたのに、ある日役人が村に来て言ったんだぜ”男手を差し出せ。これから戦争がある”……徴兵されたのよ。それも15年前にだ。王侯貴族どもの権力争いに巻き込まれて、戦場で戦っているうちに、故郷の畑は村ごと焼け野原。帰る場所も耕す畑もねえ……そのまま権力者どもの手ごまとして利用されたまま戦場で苦しみもがいて死ぬなんてごめんだからよ、ここに逃げてきたのよ」

ベルツの顔が段々と噴気を得てゆくのを、エンツォは覚めた目線

で見守っていた。

しかしどうやらベルツの関心はエンツォの顔色にはないらしく、スラスラと言葉を続けてゆく。

「こちらとしても事情があるだど？どの口でそんなことを言いやがる……俺達を村と畑から引き離したのは領主どもじゃねえか！俺達に武器を捨てさせたけりゃあ、食い扶持を用意するのが道理だろうが！」

ベルツはドン、とボロボロになったテーブルに怒り拳をたたきつけた。背後に控える盗賊達の目が鋭さを増していく。

エンツォは覚めた口調で返した。

「だからこそ、こちらも”職”を用意している」

しかし、ベルツは叫ぶ。

「その”職”が”アマデル伯の軍隊”だあ！？ふざけんじゃねえ！性懲りも無く、俺達にまた貴族どもの犬として働けつてのか！？」

ベルツの顔が紅潮している。

王侯貴族や権力者の私的な闘争に狩り出された挙句、平穏なものと生活を失った者としては、これ以上の「侮辱」はないのかもしれない。

もう一度、自分達から全てを奪った人間達の、手駒になれ、そう言うのか。背後に控える盗賊達の怒りを一身に引き受けるかのように、ベルツの怒りは激しさを増していった。

「もう散々だぜ！最初はセレニアでクレールブルク家の手勢としてあの”獅子將軍ホルスト”と戦ったんだ！その後エステンライヒに東方帝国に流れ着

いてからは皇帝の手勢に加わってホーエンスタルンとダヂを相手に戦ったさ！だがな！結局なにも得られなかった！その日を生きるパ
ンさえもな！増えたのは仲間の死体だけだった。奴らも最初は言っ
てたよ、お前らのように、食い扶持を与えてやるとな。それがこれ
だ！この有様だ！体中は傷だらけ、体の一部を失った奴もいる、声
が出なくなった奴も、男じゃなくなった奴も！もう騙されねえよ。
絶対」

そう声を張り上げるベルツの表情には盗賊というよりは、必死にハンターに抗う鹿のような純粹さがあった。

彼の言葉は決して嘘ではないだろう。

今現在、^{エステンライヒ}東方帝国全土には無数の盗賊・山賊・匪賊の集団が散布し活動している。彼らのほとんどが戦災難民や軍隊崩れの騎士達と言われ、長引く内戦で弱体化しきった^{エステンライヒ}東方帝国諸侯を尻目に毎日無数の略奪・強盗事件を引き起こしていた。戦乱と盗賊集団によって国土は荒れ果て、それがまた新しい難民と農地を失った流民を生み出し、彼らがまた新たな盗賊集団の母体となる、これが延々と繰り返されている。

^{エステンライヒ}東方帝国は今、負と滅亡のスパイラルにあり、その中でマジメに畑を耕している者などどれほどいるのか。畑を耕す者から順番に斃れているのが、この国の現状だった。

「不条理って奴だ。結局のところ、貴族どもは俺達に”死”の選択肢しか与えなかった。畑を耕しながら死ぬか、戦争に行って死ぬかの違いだけだ」

ベルツの怒りはどこかの誰かに向けられているようだった。

この戦乱を起こし、自分達を苦境へ追いやった確実に存在する「誰か」に。

対峙する黒髪の若い男は完全に根競べで負けているらしい。エンツォにささやいた。

「おい：やっぱり無理なんじゃないか。これ以上相手を刺激する前に引き上げた方が：」

思えばこの若い男もまた、平民階級出身であり、ベルツ達と同じように貴族の起こした戦乱の中で閉ざされた運命にあった人物だった。

共感したのかもしれない。

しかし、エンツォは却下し、ベルツに言葉を投げかけた。

「それでは、これからどうするつもりなんだ？」

「なに？」

ベルツの顔が歪んだ。

「このまま一生、盗賊稼業を続けていくつもりか。街にも都にも出ず、南部の街道沿いの山林にこもってセコセコと馬車を襲いながら、まともに調理もされていない小麦の塊を食って、そのまま老いて、髪が無くなり、体はしわくちゃになり、歯は抜け、野良犬の如くみんな仲良く野垂れ死にか」

ベルツはともかく、その後ろに控える盗賊達は今にも襲い掛からんとばかりに身構えた。顔が紅潮しているのは、誰の目にも明らかだった。

ただベルツは、怒りに満ちながらも、理性を失っていないようであつた。

「俺達が、俺達が好き好んでこんなことをやってると思ってるのか！？マジメに生きてても死ぬしかねえなら、法に反してでも生き残る道を選ぶしかなかった！名誉？誇り？そんなものは食うに困らねえ貴族どものぜいたく品だ！俺達には無縁の品じゃねえか！俺達には何もねえ、自分の畑も、家族も、金も、生き残る意地以外には何もねえんだ！それを晒うのか！必死に足掻く俺達を嘲って、否定するのか！？」

「俺は、ごめんだ」

怒りに猛るベルツとは対極的に、エンツォは冷め切っているように、傍目には見えた。

しかし、その瞳は、まるで猛禽類のように、獰猛さに満ちているように映る。瞳孔が、いような雰囲気を感じている。

「ただ地べたをはいずり廻って、そのまま一生を終えるなど、耐えられない」

テーブルの下に隠れるエンツォの拳が、ギリ、つと音をたてる。

「なるほど、結構。盗賊行為にはやむをえない事情があるのは異国出身の俺にも理解できる。貴族を恨む気持ちも、傷ついた仲間の仇を憎む気持ちも、戦乱の中を生き抜こうとする意地にも、理解も共感もできる。ただ、同意だけはできない。恨み言をブツブツ呟きな

がら、惨めに野垂れ死にしようとする行き方には、同意できない。
俺なら、そんな生き方には耐えられない」

「だったらなんだ」

「力を貸せ」

「何？」

「軍勢を造り、隊列を整え、街道を行軍し、帝都アリスブルグを奪う」

その言葉を聞いて、ベルツは、鳩が豆鉄砲を食らったような表情をしてみせた。

先ほどまでに彼の顔面に渦巻いていた怒気は、今はどこかに霧散していた。

エンツォの言葉があまりにも突拍子もないものだったからである。
ベルツは少し呆れて言った

「正気か」

「正気だとも、ヘル・ベルツ」

エンツォの顔には、なにやら不適な笑みがこぼれている。

「確か、前にエンツォ、と名乗っていたな。だがなエンツォ。確かに今、^{エステンライヒ}東方帝国は戦乱の只中にある。皇帝の権威は落ち、諸侯は疲弊してまともに領国経営も勤まらない。匪賊討伐さえまとも出来ないと聞く。混乱した国を乗っ取るってのは、周りが弱体化しきった勢力だらけなら、ありえない話でもない。だがな、ホーエンスタルンとダヂがいるじゃねえか。皇帝と取って代わりこの国を奪おうと競い合っているこの二つの大貴族が。しかもあんたが忠誠を誓うアマデル伯だって、先の戦乱で弱体化しきってる。だからこそ、こうやって俺達がここで堂々と盗賊稼業ができてるんだろうが。帝都を奪うなんて、とてもじゃないが信じる奴はいねえよ」

今度は逆に、ベルツの表情が冷めだした。

しかし、向こうが冷静さを取り戻しているのは、自分にとって都合だ、とエンツォは思う。

「しかもその軍勢に加われだ？」

「：悪い話じゃないと思うがね」

あくまで不適な笑みを浮かべるエンツォに、ベルツはなにやら呆れ始めたらしかった。

「ほお、どういう意味でだ？」

「盗賊や匪賊で軍隊を作る」

その言葉に、ベルツと背後の盗賊一味はにわかに表情を変える。

盗賊達の顔からはいつの間にか怒気が消えうせていた。

「確かに、今現在のアマデル伯家の実力では無理だろうな、帝都を奪うなど。だからこそ、力をつける。幸いなことに有力貴族のホーエンスタルンとダチは互いに反目し、帝都周辺で抗争を繰り返している。他の諸侯領に目を向ける気も余裕もないだろう。皇帝に至っては完全にこの二つの有力貴族に縛られ帝都から外にお触れを出すことさえ出来ないほどだ。ならばその隙に、戦乱で弱体化している周辺諸侯の領土を、我々が掠め取る。止めに入る連中などいないはずだ」

ベルツは顎鬚をいじくり、じつとエンツォの顔を見つめている。

なにやら、思案し始めたらしい。

「軍隊の人手なら事欠かない。：アマデル伯領だけでも盗賊匪賊難民乞食の類は腐るほどいるからな。彼らを糾合し、間に合わせの軍服を着せ、隣接する諸侯領を強奪する。弱体化した諸侯軍を数で踏み躪り、都市を奪う。敵の占領下に置かれた都市で繰り広げられる光景とは、どのようなものが察しがつくだろう？」

ベルツは髭をいじくりながら、強い口調で答えた。

「……略奪か」

「そうとも。まさしく匪賊の軍隊にふさわしい」

「本気で、そんなことを考えているのか」

「無論だ。でなければここまで来ないよ」

「世人の評はどうなる。お前達を悪人とののしるぞ」

「今現在はどうなんだ？」

そう言ってエンツォは道化じみた表情をしてみせた。脇に控える

実直そうな黒髪の若い男との対比が、滑稽だった。どちらも似たような髪形の黒髪だったが、雰囲気や人格はまるで違うようだった。

「もとより、盗賊匪賊に”評”などあるものか」

エンツォの顔が、ひどく歪む。

「生き残る為には、他人の評などどうでもいい。それこそ、”無縁の品”じゃないか。貴方は、生き残るために盗賊をする、と言っていたな。同じことだ。同じことを、遙かに大規模にやるだけだ。貴族どもの権力争いの中で惨めに這いずり回るくらいなら、生き残る為に町々を略奪して周り、生きていく為の糧と武器を得る…生きていく為に、自分の未来を切り開くために。誰がそれを批判できるんだ。敗北の運命を跳ね除け、戦いを続ける人間達のことを。僧侶か？神父か？学者か？俺はな、そういった類の連中が、いざ自分達の足元が戦乱となれば、仲間も市民も捨てて我先にと逃げ出すことを、その目で知ったよ。世の中はクズと臆病者と馬鹿ばかりだ。偉そうなことを言う連中ほどな。なりふり構っている暇はない。肥え太った権力者どもが私欲の為に戦乱を起こしているなら、チャンスだ。そこに殴りこんで何もかもをひっくり返すしかない。それに…」

それに？なんなんだ、と、ベルツと背後の盗賊達は、視線をエンツォに集めた。

「男なら、野心があるはずだ。馬に乗って平原を駆け回り、自分の旗を立てたいとは、思わないか」

それは、かつてエンツォの父が、その生涯にわたって捨てきれなかったものだった。

ならばこの、目の前の盗賊達はどうだ？体中傷だらけでも、野心だけは、失っていないのか？もし、失っていたら、おそらくこの「兵隊候補」は諦めないといけないかもしれない。

エンツォは饒舌でも舌がたつワケでもなかったが、精一杯の言葉でベルツたちの感情を揺さぶったつもりだった。まあこれが、自分の弁舌の限界という奴だろう。

反応は、どうか。

「……………」

…。

「……………」

まあ、いい。ゆつくりと思案すればいい・

「……………」

それに匪賊などいくらでもいる。他をあたることだって十分選択肢の一つだ。

「エンツォの”旦那”よ」

「当たり前」、か？

「二つ条件があるぜ」

よし。後はどうとでもなる。エンツォはテーブル下の握りこぶしで、交渉の成功をかみ締めた。脇に控える若い黒髪は、ホッ、と息をつく。

「なんだ」

「まず一つ。こいつらの寝床や飯は必ず守ってもらう。給料もな」

「約束しよう。もう一つは？」

「俺を騎兵にしてくれ。若いころから親父の馬を乗り回してた」

03 出発点

「何！？1頭5000マクルだ！？駄目だ駄目だ！相場の倍以上じゃないか！2000だ！2000！」

黒髪の若い男がそう叫びながら腕を振ると、背中のマントがパタパタと風に乗ってざわめく。

浅黒い異国の商人は、背丈の低い体をめいっばい誇張して反論した。

「何言ってる？これエスパンア種とイルドナ種掛け合わせたサラブレッドね！1時間乗り回しても息一つ切れないよ！5000でも安いよ！4700ね！それだけしか負けられない！4700で手打つよ！」

「馬鹿を言うな馬鹿を！どれだけぼったくるつもりだ！出しても2500だ！」

「相場で売る商人あきんどなんていないよ！お兄さん商売分かってないね！仕方ないね、4000まで負けるよ！ほんとしょうがない！」

「だーかーら！2500だって言ってるだろ！ちゃんと聞いているのか！？」

その言葉を聞いて、異国の商人は一気にへそを曲げたらしく、これ見よがしに目を細めた後、見当違いの方向を見て返した。

「あー、私どうやら耳わるいみたいね。これじゃ商談できないね。この話は無かったことにする」

それを聞いて、黒髪の若い男は呆氣にとられてしまった。

「は、はあ？」

「ハッサン！商談終わったよ！帰るね！」

異国の商人は馬の群れの世話をしている一団に向かって呼びかけた。男達はあわあわと荷物をまとめ始める。

こいつは、どうやらホントに帰るつもりらしい…あわてて黒髪の男は、自分の背後で馬の様子を眺めている鷹目の男に助けを求めた。

「おい！エンツォ！このパルシャル人を何とかしてくれよ！とんでもない値段を吹っかけるんだ！しかもいきなり帰るって言うんだぞ！」

もう、勘弁してくれといわんばかりの表情だった。この男は交渉やら商談という人間関係のバランスゲームが最も苦手なのだ。

視線を馬から外したエンツォは、ゆっくりとこちらに歩み寄ってきた。立ち去る「フリ」を見せていた異国の商人も、いつの間にかこちらに向き直っている。

エンツォが透き通った声で商人に話しかける。

「ヘル・アルムード。あれはいい馬だな。それはそうともう帰るか」

アルムード
商人の顔がとたんに綻び笑顔になった。

「おお！ヘル・エンツォ！帰るなんて冗談よ！商談はこれからね！あれ、いい馬よ！ドルーニュで仕入れたね！」

そう言ってテコテコと戻ってきたアルムードは、嬉しそうにエンツォの手を両手で強く握って上に下に振り回す。

顔には朗らかな笑顔。真っ白な歯を光らせ、体をテンポよく揺らしながら笑い声を響かせた。

先ほどとは打って変わって好々爺といった具合だ。

先ほどまで交渉していた黒髪の若い男は、自分のことが無かったことにされているような気がして、自分の役回りにうんざりしているようだった。

まあ、昔から自分はそうだった、と諦めの境地にあり、エンツォとアルムードの交渉をただ見守ることにしようと決め込んだ。

そういえば廃屋での交渉でもそうだったな、と。

「どれほど走れる」

エンツォはささやかな微笑みを浮かべながら、馬を一瞥して言った。

「大の大人乗せて、調子の悪い時でも最低一日50キロは走るね。飯の量は他と大して変わらないよ」

「最悪で50キロ？本当ならすばらしいな」

「本当かどうか、あの伊達男に聞いたらしいね」

そう言ってアルムードはエンツォの背後を指し示した。そこは何もない、絵の具を塗りたくられたような一面緑の平原であり、雲ひとつ無い青空が覆いかぶさっていた。緩やかなデコボコの地形に地平線が隠れている。

その方向から、一頭の馬が猛り狂うように疾駆して、こちらに向かってきているようだった。背中に、一人の男を乗せている。

「ははは！どうやら伊達男と愛称があうようよ！バクードもはしゃいでるようね！」

「バクード：馬の名前か」

「そうよ！砂漠に住む大鷲の名前ね！空を飛ぶように走るよ！体もでかいね！」

そうこうしているうちに、バクードと呼ばれた駿馬は背後に砂煙を立てながら、猛スピードでこちらに突進してくる。

なにやら止まる気配がない。背に乗っている騎手が、走っているうちに高ぶる馬の気分をなだめ治めようとしなのだ。

駿馬はただひたすらに際限のない滑走に興奮して、速度を加減することなく爆走している。

馬の蹄鉄が地面を叩く音が、エンツォとアルムード、その傍らに突っ立っている黒髪の男の鼓膜を刺激する。

「あれ？まずいね。どうやら長いこと船に積み込まれてたから、バクードの奴ひさしぶりの平原に興奮してるようね！」

「さらに騎乗している男がくせものだからな」

もう疾走する馬との距離は100メートルを切っている。しかも、綺麗にも一直線上の進路でエンツォ達の方角に爆走していた。

さすがに、アルムードは身の危険を感じたようだった。

「ああ！まずいね！」

「おいエンツォ！撥ねられるぞ！」

黒髪の若い男が叫び、アルムードがあわてて逃げ出そうとする。

が、エンツォは身動き一つしなかった。

バクードと呼ばれた駿馬は、大地に叩きつける蹄鉄の音を響かせながら、突進してくる。

エンツォとの距離が10メートルを切り、駆け巡る爽快感に猛るバクードの、興奮に満ちた嘶きが響いた次の瞬間。

駿馬は背を、これでもかというくらい大きくのけぞらせて、大空に前足をかざし、筋肉が張り付いた腹をエンツォに見せ付けながらその前足で十分砂埃を撒き散らした後、前足の蹄鉄を大地に思い切り叩き付け、停止した。

エンツォとの距離は、1メートルを切っていた。まさに「目の前」だった。

横で見守っていた黒髪の男が、怒って言う。

「おいベルツ！何を考えてるんだ！危うくエンツォを撥ね殺すところだったぞ！悪ふざけで、すまないぞ！」

異国の商人が呆れて笑うよりまえに、バクードの背に騎乗しているベルツの笑い声が響いた。

「ハハハハ！すごいぞエンツォの旦那！この馬は！あれだけ走り回ったつてのに汗一つかきやしねえ！息も切れてねえだろ？化け物だぜ！俺はこの馬にするぞ！親父の馬とは比べ物になんねえよ！」

無視された黒髪の若い男は気分を害したように表情を険しくするが、エンツォの顔面は仮面を被ったように変化しない。

散々駆け回った駿馬は、ベルツの言うとおりの汗一つ、息一つ切らしていなかった。

なるほど、たしかにいい馬だ。

ベルツは一通り高笑いして腹を揺らすと、エンツォとアルムードを見下ろして言った。

「で？俺のかわいいちゃんはどくなるんだ？」

エンツォはアルムードに視線を移すと、この異国の商人の顔がやたらと血色が良くなっているように見えた。同じくベルツの顔は煌々としている。よほどいい女にめぐり合ったかのように。

どうやら、すでにこの二人の間で商談は成立してしまっているようだ。

後は最終責任者であるエンツォが判子を押すだけである。

「あー、そうだったな。まずは商談だ。で、ヘル・アルムード。一頭いくらだったかな？」

アルムードはエンツォの瞳を見つめ、意味深に間を十分とって笑顔を作った後、言った。

「4000：の予定だったけど、この伊達男にあんない走りを見せてもらっちゃね。あんなに喜んでるバクード初めて見たよ！……3800！負けたよ！3800でいいね！」

ありとあらゆるおべっかと演技を使って、アルムードは「寛大で友好的な譲歩」を演出してみせた。

しかし横に控える黒髪の若い男は（それでも相場の約2倍だろうが！）と背後からアルムードを睨みつける。無論、アルムードはそんなことは意に介さない。

エンツォが答える。

「…結構。3800だな。10頭すべて買おう」

その言葉を聞いて、アルムードとベルツの表情がいつせいに歓喜に彩られた。

「よし！んなら真正銘こいつは俺の馬ってことだな！？エンツォの旦那、断言できる、こいつは最高の買い物だぜ！」

そう言って大笑いすると、ベルツはバクードを駆って再び平原の彼方を目指して駆け出してしまった。よほど馬と風を感じるのが好きらしい。なるほど、爽快な男だ。アルムードが先ほど言ったことは単なるお世辞だろうが、しかしあいつの少年のようなはしゃぎぶりをみるとどこか透き通った風が肌を撫でるようで心地いい。

「商談成立ね。支払いは3800マクル相当の金塊よ。エステンライヒ東方帝国の硬貨は私の国で信用性ないね」

「抜け目無いな。ほら、もっていけ」

砂金の入った小さな皮袋を5個投げ渡すと、アルムードは中身を

しつかり確認した後、本当に嬉しそうに微笑みを浮かべた。

「ヘル・エンツォ！世の中戦争やら反乱やらいっぱいあるけどね、お金は世界共通の”友好”よ！またここ寄るね！その時もよろしく頼むよ！」

そう大声で言うのと、アルムードは仲間の一団に声を掛け、自分達専用の馬に乗って引き上げていった。後には取引した9頭――ベルツが一頭使っているの――だけが残った。

後は周辺で待機している役人や使用人を呼び寄せて馬を連れ帰ったら今日の用事はしまいである。

全てはうまくいった、とエンツォは思っている。悪くない商談だったと。

しかし、黒髪の若い男の顔には、苦い表情が張り付いていた。

「エンツォ。俺にはよく分からないよ。確かに、あまり交渉ごとは得意じゃないけどさ。しかし相場の2倍だぞ。しかもあの商人の態度の変わりようと言ったら」

黒髪の男がここぞとばかり愚痴をこぼす。それを聞いて、エンツォは冷ややかに答えた。

「アシュレイ。バルシャル人は砂漠の民だ。極限状態のサバイバルの達人だよ。奴らは野生の犬と同じだ。すぐに誰が組織の長であるか”鼻”でわかるのさ」

アシュレイと呼ばれた黒髪の男は少しため息をつく。根っからの苦勞人というオーラの似合い悲惨な若者だ。

「俺が下っ端だと思われたから？なら最初からエンツォがやればよかったんじゃないか」

恨みがましい目で見つめるアシュレイを、なだめるように言う。

「お前もこれからは責任ある立場に立つことになる。いつまでも小役人根性じゃどうにもなくなるぞ」

そうだった。今のところ、アシュレイはエンツォにとって腹心の側近である。

かつて、滅亡に追い込まれたトレマーズからこの地に流れ着いた

エンツォが初めて知り合ったのが、田舎の村役場で難民処理担当を努める小役人のアシュレイだった。

その後、アマデル伯の元で軍人として働くことになってからアシュレイを部下に引き込み、弱体化したアマデル伯の再軍備計画に着手してからは片腕として活用している。

元小役人だけに経理、人事関係の事務処理能力が高く重宝していた。

しかし、これから造る軍隊がベルツのような元盗賊・匪賊が中心であるからには、アシュレイのような教養のある人間がますます重要となるのは明白だった。

軍隊の規模が大きくなれば、隊長どころではなく軍団司令レベルの立場につくことになってもおかしくはない。

「部下となる連中との接し方も、人との交渉みたいなもんだ。今のうちに馴れておけ。バルシャール人と交渉できるようなら、たいていの人間を相手にしても不足はないだろう」

そういうものか。無愛想にうなづくアシュレイの目線はエンツォからはずれ、走り回るバカードに向けられた。

「で、値段のことは？相手に押し切られて相場の倍以上払ったんじや、”交渉”というよりは単なる”負け戦”をただけじゃないか。それなら俺でもできるぞ」

「あれぐらいの方がいい。確かにいい馬だし、何より商人どもは金のあるところに寄ってくる…血の匂いにひきつけられるサメのようにな。金払いが悪いと愛想を尽かされるぞ。国境を越えて商売をするバルシャール人はいい情報源だ。馬以外に武器も運んでくるしな。馬の代金で手に入れるのは馬だけじゃない。”信用”と商人たちの巨大な”ネット”だ」

おそらく金払いのいい顧客の情報はアルムードを通じ他の商人たちに広く流布されるだろう。商人にとって長い道中でのさまざまなトラブルは助け合いが原則であり、情報交換は信頼関係の構築に不可欠である。

共有された情報に接した多数の商人が、それぞれの商品、情報を携えてまた自分達の元を訪れるに違いない。

「なるほど。一頭3800で釣りが来るといいうわけか。まったく、世界は広いよ。こんなこと、村役場では一生触れることは無かっただろうな」

これからは、どんどん視野を広げていってもらわねばならない。エンツォは一人で不敵な笑みを浮かべながら思った。

これから自分が歩もうとしている道がどれほどのものか、おそらくアシュレイには、想像も及んでいないに違いない。

04 アマデル伯

アマデル。^{エステンライヒ}東方帝国の南部に位置し、東に砂漠と油の国パルシャルへ続く”砂の回廊”を持ち、南には内海を挟んで草原と動物の国イフリジアを望み、西を標高三千メートル級の山脈に遮られた、農耕と回廊貿易を主産業とする人口30万ほどの封建領土である。領主は”アマデル伯”を代々世襲する^{エステングラーツ}東方貴族ラウプクルツ家。現当主はハインリヒ・ラウプクルツ。フロレンシアからの流れ者、エンツォの主君だった。アマデルの中心都市、バナブルクの中心部には巨大な聖堂がそびえ立ち、それを見下ろすように郊外の小高い丘の上にラウプクルツ家代々の居城、バナブルク城が鎮座している。色気のない灰色の外壁を、よどみのない青空に見せ付けて。

エンツォは主君ハインリヒ・ラウプクルツからそのバナブルク城に招牌された。巨大な応接食堂には目もくれず、城の最奥、城主のもっともプライベートな居住区画、寝室へと招かれて。ここいらの区画はよほどの重臣やラウプクルツ家の一族でなければ立ち入れなかったが、エンツォには気楽なものだった。かつてはこの辺りを歩くだけで城の古参召使や当主の重臣どもに鋭く睨みつけられたものである。

だが、彼らはもはや”いない”

当主ハインリヒ・ラウプクルツは先代の長男だったが、出来が悪く、先代は次男に跡を継がせようとし、家臣の大半がそれに味方した。ハインリヒは追放されることを恐れ、こちらに流れ着いたばかりのエンツォを拾い、彼に手配させクーデターを起こしたのだ。その際に、ハインリヒに反対した家臣の多くは”消され”、逆に流浪者のエンツォはハインリヒ第一の側近として重用されることになった。

寝室は無骨な古典様式で、木造の壁が嫌に空気を沈下させていた。窓はない。ろうそくの明かりが視界を揺らす。部屋には三十路を迎えた主君ハインリヒが、着崩れたガウンに身を包みベッドに腰掛けていた。時刻は昼になろうとしている。酒を片手にしていた。

「来たな、エンツォ。座れ」

少し酔いを含めた呂律でエンツォに椅子を薦める。エンツォはろくに会釈もせず、招かれるままハインリヒの向かいの椅子に腰掛けた。ハインリヒから贈られた黒い官服に身を包んでいる。

「ご公務がいそがしい御身では」

昼間から酒に興じるハインリヒを呆れる口調で静かに言う。が、いつものことである。

「なに、昨日は夜遅くまで仕事づくめだった。一日遅れの晩酌だ。貴様も飲むか。ええ？」

ブロンドの髪を貴族らしくオールバックに整えて、酒を片手にへらへら笑い、権力者は墮落に舌鼓を打つ。一地方の領主としてはあまりにだらしなく、そして若かった。まだ三十路。一人の大人として成熟してもいい年頃であったが、ハインリヒにとってはまだ三十路である。まだ遊びがゆるされる年頃なのだ。しかし、その心のうちは若輩者としてはハングリー精神に富んではいた。酒をぐびりと飲んで、エンツォに急かされるよりも前に話を切り出した。

「で、だ。”奴ら”は使えるのか」

「どちらの？」

「貴様が新しく連れて来たほうだよ」

ひっく、と、体を揺らす。だが目だけはシラフのようだった。

「あの匪賊ども、ゴク潰しには、ならんだろうな」

エンツォが勧誘してきたベルツを筆頭とする盗賊集団のことだった。

「金を払うんだぞ」

「ご心配には及びません。なかなか使える連中です。元はセレニア

で”獅子將軍ホルスト”と戦っていたクレールブルク家の配下のもの
でしたから。そこの農奴・乞食どもよりは十分使えます」

「はっ！ホルスト、ねえ。貴様の故郷を滅ぼしたやつだったな。な
んだ、今はデューダー王だったか。なかなか景気のいいらしいじゃ
ねえか。北の北方諸侯領^{ノルトフュスターライヒ}を叩いて、王位継承争いの末に主筋のカス
ター王家を滅ぼし、フロレンシアを蹂躪して、しまいいはここ、東^エ
方帝国にまで手を出してくる、って噂まで流れてやがる。手に負え
ないやろうだ。だのに東方諸侯どもは内輪の権力争いに明け暮れて
共倒れしようとし、皇帝は耄碌して老い先短いときた」

”ホルスト”の名が出たとたん、エンツォの鷹のように大きく、
鋭い目が、嫌によどみを増した。ハインリヒの言うとおり、ホルス
トはエンツォの故郷、フロレンシアを侵略し、その都市国家郡をこ
とごとく滅ぼした張本人である。元はセレニア王家カスター家に使
える地方貴族だったが、15年前に王家の内紛に乗じて覇を唱え、
瞬く間に領土を拡大し、カスター王家を滅ぼして自らを”デューダ
ー朝セレニア王”と称して国を乗っ取ってしまった。

「本当ならだ、奴がカスター王家を滅ぼした時点で我らが東方帝国^{エステンライヒ}
は奴を滅ぼすべく出撃するべきだった」

酒に酔いながらただの一地方領主でしかないハインリヒは、高ら
かに大戦争の戦略を述べようとした、が、それはできなかった。東^エ
方帝国はかつて”東方辺境伯領”と呼ばれ、セレニア王国の東部国
境を蛮族の侵略から守る地方国家だった。そのためセレニア王カス
ター家とは血縁関係がありホルストとの権力争いに”助太刀”する
名目はあったのだが・・・

「んが！皇帝のやろうがボケはじめ、そこに付け入って重臣のダヂ
家とホーエンスタルン家が権力争いを始めやがった。東方帝国は前^{エステンライヒ}
代未聞の内戦、皇帝は執務不能ときたもんだ。挙句西のセレニアか
らホルストと諸侯の内戦から逃げてきた難民どもが流れ込んできて
帝国内は未曾有の大飢饉。戦争で死ぬは飢餓で死ぬは、国土はめち
やくちやに荒れてホルストどころじゃなくなっちゃったってわけだ」

いまや、東方帝国は亡国の瀬戸際に立たされていた。酒によってベラベラと口上を垂れるハインリヒをよそに、エンツォはさめた目で遠い故郷を思いやった。十年前に逃げてきた道を遡り、自分が生まれ、育った故郷。それを滅ぼしたホルスト。自らの野心を自分に託した育ての父。かつての我が故郷のように滅亡への道を転げ落ちる東方帝国^{エステンライヒ}。そして今、ここにいる自分。すべてが一つなぎにつながり、未来への道筋を指しているように思われる。未来への道筋・・つまりそれは。

「だが、そんなことももう終いだ。この俺！ハインリヒ・ラウプクルツがアマデル伯の地位に返り咲いたからにはな！」

ハインリヒは酒をもった片手を高らかに掲げる。

「今すぐにアマデル軍を建て直し、軍勢を出撃させ、ダヂ家とホーエンスタルン家を滅ぼし、帝国を統一させ！そして統一帝国軍をもってデューダー王などと僭称するホルストめを滅ぼしてくれるわ！」

未来への道筋・・つまりそれは、今はただの地方領主でしかない主君ハインリヒを、東方帝国皇帝に就かせ、ホルストと決戦させることだった。

（だが今は、ただの夢見事でしかない・・今のうちは）

しかし未来は確実に近づいている。ただの貴族の箱庭であったアマデル領にはいまや元軍人や軍師、兵隊志望の農奴・乞食・難民の類が終結しつつある。これが強大な軍隊のタネとなるのだ。

「そこでだ、エンツォ。」動き”があつた」

エンツォはハインリヒの口から不意に出た言葉に、耳をぴくりと動かした。

「”動き”ですか」

今まで大概のことはエンツォに丸投げしていたハインリヒが、自分から状況を動かそうとするのは珍しいことだった。エンツォはすこし嫌な予感がした。ハインリヒは上半身を前に出し、顔を不気味にゆがませながら言った。どうやらここからが本題らしい。

「我がアマデル領の東隣、ブラウデン伯の領主カイゼール家で揉め

事があった」

それはエンツォも知っていた。緑の丘と湖の国ブラウデン。その領主カイゼール家は当主があまりに横暴であったため家臣団との間で衝突がおこり、内紛状態にあった。

「どうやら決着がついたらしい。当主であるダン・カイゼールが家臣団の大半を粛清したって話だ。今じゃ城の召使でさえも人手が足りなくて荒れ放題だって言うぜ。役場に届けられる訴状もほとんど処理できず庶民のうっぶんがたまってるんだと。まじてや領土の警備は、家臣団を粛清しちまったからもっぱら傭兵に頼ってるって話だ。その傭兵も元は乞食や難民だよ。そこらの村を荒らしては食いや金目のものを奪い取ってる。それを役場に訴えても、その訴状そのものが処理されねえ。ブラウデン領は今や無政府状態ってわけだ。つまり、俺が何を言いたいかわかるか？」

まさか、いまさら聞くほどのことではない。エンツォは鷹のような目を鋭くさせて、答えた

「つまり私に、給料分働けと」

ラッパが鳴る。高らかと。

戦闘装束に身を包み、千人単位で三隊に分かれた総勢三千名の人の群れが、青空の下ラッパのリズムに合わせて行進する。靴の音が大地を揺さぶる。それぞれの部隊の前を大きな旗を持った兵士が先導し、その後ろから長方形に隊列を整えた人郡が追従していた。

——行進訓練。まるで児童の遊技会の練習に見えるが、軍事訓練のもっとも初歩的で、集団行動の根本となるもっとも重要な基礎訓練だった。

この種の類の訓練は、兵士達がラッパの音に絶対追従するようになるまで延々と繰り返される。ラッパの音は神の声と同義であり、指揮官の命令を伝えるもっとも直接的で簡単な手段だった。どのリズムの音がなんの命令を意味しているのか。それを体が覚えるまで訓練は続けられ、歩く早さが全員完全に一致するまで行進は繰り返される。歩く早さが個人で異なるのは人間としてあたりまえのことだが、軍隊の場合——特に中世的な軍隊の場合は——それは決して許されることではなかった。無線も拡声器もない時代の場合、個人個人の連携が人づてになるしかなく、部隊は常に密集して行動しなければならぬ。ひとり歩くのが早すぎたり遅すぎたりするだけで、前後の兵士に影響し、その”ズレ”は人波にたちまち部隊全体に波及して隊列そのものが崩れてしまう。

この時代、陣形や隊列を維持できない軍隊は、ただ敵に殴り潰され踏みにじられるしかない。行進というのは、戦場で生き延びるためのサバイバル術の一つだった。

青い平原に軍靴の音が鳴り響く。行進する隊列を、匪賊上がりの指揮官、オーランド・ベルツは小高い丘から、馬上、酒を飲みながら悠然と眺めていた。

（下手つくそだぜ。度台ムリなのさ）

吐き捨てるように、心の中で言う。

（半分はクワしか持ったことのない農民ときたもんだ）

ベルツを引き込んだ後、鷹目の男、エンツォはベルツにこの部隊を見せ付けた。

エンツォは彼の主君たるアマデル伯から軍隊の編成を命じられた後、

腹心の部下である青年アシユレイ・タルベルクを四方八方の貧村や難民キャンプに使わせ兵士の勧誘を行わせた。なけなしのパンを恵んでやり、その後「軍隊に雇われればもっとパンが食えるぞ」と吹き込んだらしい。入念にも、あらかじめアマデル伯配下の者を行商人や旅人に変装させあちこちに送り込み、「アマデル伯の誘いに乗れば儲かる、とあちこちの村の連中や乞食・難民の類が競ってアマデル伯の元に仕官している」と噂を流させていた、という話をアシユレイから聞かされ、あのエンツォとかいう男の狡猾さをベルツは知った。卑怯や悪知恵、というよりは、もっとも効果的な方法——自分が無駄な苦勞をせずにすむ方法——を思いつく類の人間なのだろう。そういう連中は大概にして忠実や誠実、正々堂々という言葉にあまり魅力を感じず、策略や罠、陰謀や工作といった類のものに入れ込む傾向がある。晴天の下に決闘を申し込むのではなく、夜道に背後から切りかかるタイプだ。怠け者だが有能。実利に恵まれ、評価に劣る。——司令官としてうってつけの人物だった。

そのエンツォがかき集めた急ごしらえの軍隊は、元軍人のベルツから言わせれば軍隊の範疇に入らない乞食の寄せ集めだ、とエンツォに言い放った。これじゃあまともに戦うどころか、一日に6キロ移動できればいい方だろう。戦闘となれば30分以内に8割が逃げ出さなければよく頑張ったと褒められるな。ちなみに通常の軍隊は1日で30キロを移動をする。つまり駄目駄目のさらに下だということだ。不合格の”ふ”の字ももっていない。

——「なら鍛え上げろ」

エンツォはそう言ってベルツにこの部隊を押し付けた。そして、今に至る。ベルツと、彼の下で盗賊稼業に勤しんでいた元軍人達は、この「できそこないの三千人」の教官としてエンツォに雇用されたのだ。

「んなこと言ってもねえ」

酒を飲みながら、愚痴を垂れる。

「俺らだって元は百姓同然だったっての。教官なんぞ肌に合わねえんだよ」

そう言って、ベルツは馬の腹を蹴った。異国の商人から買い取った駿馬である。馬はたちまち駆け出し、坂を下り、行進する隊列の前に出た。

「おらあ！横列がずれてんだよ！足音を聞いてリズムに合わせろ！下じゃねえ前の奴の頭を見て隊列を崩すな！」

三千人の足音に消されないよう怒号の限り叫ぶ。

（ちっ・・・少し行進速度を上げただけで隊列が崩れやがる・・・）
その後、行進中の二列縦隊から三つの長方形の隊列に展開する訓練が行われたが、その結果は惨憺たるものだった。展開中に人の群が混ざり合い、混乱をきたし、長方形どころか三匹のミミズのような駄列になってしまった。とてもではないが、まともな軍隊とは言えない。

（所詮は乞食と農奴の寄せ集めか・・・行進、ってより、軍隊、ってより、人の群に毛が生えたようなもんだぜ。戦闘なんでもっての他じゃねえか）

ともかくも、今は訓練を繰り返すしかなかった。

盗賊で食っていた時よりも、舌打ちの数が格段に増えた気がする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2633h/>

黒装束の鷹

2010年11月4日13時36分発行